

柴さんと歩んだ「東欧史研究」

－ふたつの「20世紀国家」の建国から解体まで－

林忠行（京都女子大学）

柴宜弘さんと最初にお会いしたのがいつだったのか、今となっては思い出すことはできない。しかしそれが東欧史研究会の場であったことはたしかである。東欧史研究会は1975年4月に設立された。私が大学院に進学したのはその年のことで、進学後しばらくしてから同研究会に入り、例会に通うようになった。ただし、柴さんはその年から2年間、ユーゴスラヴィアに留学しているので、実際にお会いしたのは帰国後だったかも知れない。柴さんは私よりも4歳年長なので、右も左もわからなかった私にとって、柴さんのすがたは「大先輩」に映っていた。ともかくも同じ目線でなんとか柴さんと話ができるようになったのはかなりあとのことであつたと思う。

柴さんの研究歴をみると、私のそれとよく似ている。それぞれの研究対象であるユーゴスラヴィアとチェコスロヴァキアという国家がたどった歴史に多くの共通性があり、出発点に少し差があるとしても、同じような研究の潮流のもとで、ふたりはそれぞれの研究対象をみてきたからである。

ふたりが研究をはじめた1970年代の日本の東欧史研究は、現地留学をへた研究者が、現地語の文献や史料にもとづいて、どちらかといえば東欧地域の多様性により大きな関心を寄せながら研究をするという流れにあつた。ソ連と東欧諸国をひとくくりに語る時代が終わり、東欧諸国の多様性をていねいに見るといふ流れが主流となり、そのような潮流のもとで育つた若手研究者が研究論文を発表し始めていた。柴さんは1973年に最初の論文を発表しているが、それは南スラヴ国家の形成をめぐる論文であつた(柴1973)。それから5年遅れて私は最初の論文を発表するが、それはチェコスロヴァキア独立運動を扱ったものであつた(林1978)。ちなみに私の最初の論文の掲載誌は『東欧史研究』の創刊号で、柴さんはそこに「ユーゴスラヴィア歴史研究の現状」といふ論文を寄せている。

その後、柴さんと私がおなじ場で研究を発表するようになるのは1980年代末、東欧地域での体制変動がはじまってからである。私たちは当時の体制転換を同時進行で追うことになったが、その過程で、本や雑誌でふたりの現状報告が並ぶことになった。たとえば、南塚信吾・宮島直樹編の『'89・東欧改革：何がどう変わったか』(1990)、南塚信吾編『東欧革命と民衆』(1992)、雑誌『国際問題』の特集「東欧の民族問題と紛争〈焦点〉」(1991年12月号)などであり、また岩波ブックレットの『シリーズ東欧現代史』

(1991)でも、それぞれが1冊を担当した。

このような流れのなかで、1998年には、ソ連・ウクライナ史の中井和夫さんとともに『連邦解体の比較研究：ソ連・ユーゴ・チェコ』という共著も生まれることになった。ここであつかわれた三国は、第一次世界大戦の過程で誕生した複合国家で、時期の差はあるがいずれも社会主義国家となり、連邦制を採用し、ほぼ同じ時期にそれらの国家は解体したのである。ハンガリー人の歴史家ベレントがつくり、英国人史家のホブズボームが広めたという「短い20世紀」”the short twentieth century”という言葉借りるなら、この三国はまさにその「短い20世紀」を体現する国家であったといえる。

しかし、しだいに柴さんと私の研究上の出会いは少なくなる。柴さんは、1992年から東京大学教養学部で教鞭をとり始め、私は1994年から北海道大学スラブ研究センター（現スラブ・ユーラシア研究センター）に研究の場を移した。このころからふたりの研究志向に少し差も現れるようになったといえる。柴さんはユーゴスラヴィア紛争をめぐる問題を追いかけてながら、どちらかといえばバルカン史というより大きな枠組みでの仕事为中心となり、さらに歴史教育という分野にも研究を広げていくことになった。私も中・東欧地域での体制転換過程を、おもにヴィシエグラード4か国（ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー）に焦点をおきながら比較政治学という領域で分析するということが多くなった。このような研究志向の差がふたりの出会いを少なくする要因であった。

2010年に柴さんは東京大学を定年で退職され、その後しばらくしてから城西大学に活動の場を移された。その翌年に、私も現在の京都女子大学に移籍した。その後も柴さんとの出会いはほとんどなかったが、東欧史研究会の2018年度シンポジウム「歴史としての「ユーゴスラヴィア」—建国100年の地点から振り返る」（2018年12月1日：立教大学池袋キャンパス）の会場でひさしぶりに柴さんにお会いした。そのシンポジウムは、まさに柴さんがそれまでにお育てになった若手の研究者たちの発表の場となっており、私は、バルカン地域研究が新しいステージに入りつつあることを実感することになった。そこに柴さんは討論者として参加していた。

その会場で、柴さんは私に「いま、第一次世界大戦期にロシアで編成されたセルビア義勇軍について研究をしている」と告げた。いつもの少しはにかむような口調だったと思う。私もいまの職場に移ってから歴史研究に重点をもどし、第一次世界大戦期にロシアで編成されたチェコ人とスロヴァキア人の義勇軍の研究を再開し、それについて論文を書き始めたところであった（林 2014）。柴さんはそれを知っていて、「また一緒に仕事をしよう」とおっしゃった。それが、柴さんとの最後の会話となった。

その後、2020年末に出版された大津留厚編の論文集に、柴さんのセルビア義勇軍についての論文（柴 2020）が掲載されており、それをみた私は柴さんとの共同研究に夢を膨らませることになった。しかし、そのわずか半年後に柴さんの訃報が届いた。そして、それから2か月をへてようやく私

のチェコスロヴァキア軍団についての単著(林 2021)が出版されたが、それは柴さんの御霊前にお送りすることになったのである。

私の著書が出た翌月、柴さんの『ユーゴスラヴィア現代史』の新版が出た。柴さんの研究の集大成というべきこの本の新版を早速、読んだ。そして、もうかなわぬこととはいえ、まさにふたつの「20世紀国家」の歴史全体について、もう一度、柴さんと語り合いたいという思いをおさえることができなかった。

あらためて、柴さんの研究と教育での大きな貢献に感謝申し上げて、私の思い出話を終えたい。

関連文献

- 柴宜弘, 中井和夫, 林忠行 (1998) 『連邦解体の比較研究: ソ連・ユーゴ・チェコ』 多賀出版.
- 柴宜弘 (1973) 「南スラヴ人統一国家形成をめぐって—ユーゴスラヴィア 1917~1921」 『歴史学研究』 403号, 18-23 ページ.
- 柴宜弘 (1978) 「ユーゴスラヴィア歴史研究の現状」 『東欧史研究』 創刊号, 239-248 ページ.
- 柴宜弘 (1990) 「ユーゴスラヴィアの改革」 南塚信吾・宮島直樹編 『'89・東欧改革: 何がどう変わったか』 (講談社新書), 227-262 ページ.
- 柴宜弘 (1991) 「多民族国家ユーゴスラヴィアの解体—民族対立と連邦制の問題」 (東欧の民族問題と紛争<焦点>) 『国際問題』 393号, 33-45 ページ.
- 柴宜弘 (1991) 『ユーゴスラヴィアの実験—自主管理と民族問題と』 (シリーズ東欧現代史 4, 岩波ブックレット No. 205).
- 柴宜弘 (1992) 「ナダリ村の農民とセルビアの難民の意識調査から」, 南塚信吾編 『東欧革命と民衆』 (朝日選書 451), 223-238 ページ.
- 柴宜弘 (2020) 「それぞれのユーゴスラヴィア—セルビア義勇軍の理念と実態」 大津留厚編 『民族自決という幻影—ハプスブルク帝国の崩壊と新生諸国家の成立』 昭和堂, 37-61 ページ.
- 柴宜弘 (2021) 『ユーゴスラヴィア現代史(新版)』 岩波新書.
- 林忠行 (1978) 「チェコスロヴァキアの独立運動—エドヴァルト・ベネシュの活動をめぐって」 『東欧史研究』 創刊号, 136-150 ページ.
- 林忠行 (1990) 「チェコスロヴァキアの改革」 南塚信吾・宮島直樹編, 前掲書, 129-159 ページ.
- 林忠行 (1991) 「チェコスロヴァキアの連邦解体」 『国際問題』 393号, 20~32 ページ.
- 林忠行 (1991) 『粛清の嵐と「プラハの春」—チェコとスロヴァキアの40年』 (シリーズ東欧現代史 3, 岩波ブックレット No. 204).

『中欧研究』柴宜弘先生追悼号（2022年3月）

林忠行（1992）「プラハの共働きサラリーマン一家」，南塚信吾編，前掲書，83-108 ページ。

林忠行（2014）「チェコスロヴァキア軍団—未来の祖国に動員された移民と捕虜」山室信一他編『現代の起点 第一次世界大戦 2 総力戦』岩波書店，55-77 ページ。

林忠行（2021）『チェコスロヴァキア軍団—ある義勇軍をめぐる世界史』，岩波書店。